理性の神様

堀田　素生

6月。繁華街の外れを目指して、初夏の湿った空気の中を歩く。大きな建物のガラス扉をくぐると、俄かに冷たい空気が身体の正面に吹きかかる。盗難防止の探知機のついた近代的なゲートを通り過ぎ、見上げるほど長いエスカレーターに乗る。登りきったフロアのすりガラスに幾種類もの異国語が並べるように彫り込まれている。一番上に日本語で図書館と書かれたすぐ下に英語でLibraryと書かれていることから推測するに、これらの異国語はすべて「図書館」という意味であることが分かる。

数多の本棚が並ぶ。理化学の棚から一冊の本を手に取る。私はこのとき中学二年だった。多分同年代の子供は私が今こうしている瞬間、学校で授業を受けているか、部活動にいそしんでいるか、友達と談笑したりふざけあっているかはわからないが、青春と名付けられたその二度と訪れないとされている日々を生きているのだろう。

私が最後に教室に足を踏み入れたのはもう一年以上前だった。中学に上がると子供の社会は一気に変わる。いざこざ、裏切り、特定の人物を集団から排斥する動き、容姿や能力の格付け、犯罪じみた悪ふざけ、そんな大人の世界にあるような様々なしがらみが、善悪の判断や共感性の未熟さという残酷な純粋さと合わさって、極端に強調された形で現れるようになる。たとえ自分がそれらの悪意の標的にならずとも、誰かが踏みつけられ、虐げられたりしているような空間で過ごしていると、思いのほか深く心が傷ついて行くものだ。

私は当時、精神的な障がいを抱えて引きこもっていた母親にほとんど八つ当たりのような形で毎日のように罵倒され、彼女のその混沌とした精神状態に巻き込まれていたため、ある程度重い抑うつ状態を感じていた。そんなコンディションのままあの教室のような、粗野な空気の中で正気を保って生き延びるのは至難の業だった。そのような事情が絡み合って私は入学から一ヶ月ちょっとで中学校に行けなくなった。

家にいると母親にまた罵られるので、私は図書館に通うようになった。理不尽な状況に置かれると、人間はしばしば論理や説明に縋(すが)りたくなる。説明不可能性、わけの分からなさ、混沌は不安を呼び起こし、理性はそれらから人間を澄んだ静穏へと救い出すのである。

世界の理不尽さに振り回されている私にとっては、世界を説明する理に触れようとすることは自然なことだったのかも知れない。

理化学の棚から手に取った本を開くと、左右のページいっぱいに水や酸素、あらゆる物質の分子模型の図が現れる。目に見えている世界が本当とは限らない。本の中にあるのはここと違う世界であり、真実の世界だ。世界の表面だけを見て、すべてを知った気になって感情的になったりするのは馬鹿のすることだ。その時あまりにも若かった私はそんなことを思っていた。偏りなく色んな本を読んでいたというよりは、とりわけ自然科学から始まって、心理学、精神医学、もう少し年齢が行ってからは哲学や文学というふうに触れる幅が広がっていったように思う。私は、この世界が何故在るのかを知りたかった。世界の根源に近づきたくて本を読んでいたのに、知識が増えるに連れ、それは決して解き明かされることのない謎であり、そもそもなぜ自分がそんなものに縋っているのかということにも気付いていった。結局のところ、世界の理を識ることで、ただわけも分からず翻弄されるだけの無力な自分を否定して、この世界を創造した何か神のようなものよりも優位に立ち、その誉れをこの哀しい人生（と当時自身で思っていたような人生）のせめてもの慰めにしたかったのだろう。そうやって世界のすべてを解き明かした暁には、かのファウスト博士も到達できなかったような領域をも制し、理性の神様のような何かが私の意識に現れ、私をこの混沌とした地獄から救済し、ヒト（と書いて愚かと読む）ではない何かになることができるはずだ――――非常に馬鹿らしく非現実的だが、そう信じ切っていた。

そういう復讐心か、妄想か、病的執心に似た何かで頭も心もいっぱいだった。そんなことより、何が楽しいかを、何が好きなのかをもっと真剣に探せばよかったと、今となってはそう思う。もちろん、読書や勉強、知識と戯れることだって楽しくなかったわけではない。しかし純粋に楽しみだけでやっていることではなかった。だから私は寂しかった。何かをしているときに内側から沸き起こる、好きとか楽しいという自分の感情を、理性的ではないからと馬鹿にして、自分自身から切り離したりしていた。感情の中に飛び込んでいくことが怖かったのかもしれない。それは自ら混沌の中に身を投じ、自分自身という人間の説明不可能性、わけのわからなさに直面することだからだ。しかしそうやって自分の感情をずっと無視していると、人間は寂し

くなる。自分自身という一番近い人に、分かって貰えないということだからだ。わけのわからなさ、激しさも全部ひっくるめて受け止めてもらえないということだからだ。

だから今の私は、何事も楽しいかどうか、好きかどうかで、やるやらないを決めている。しかし私は、だからと言って自分自身になれたわけではないのかもしれないと最近はよく思う。ちょっとしたウソ、駆け引き、犯罪ではないがまあまあ悪いこと、ひとを傷つけるとわかって敢えてやるようなこと、そういう人間臭い何かがとても苦手だからだ。それは倫理的に優れた人間というよりむしろ、悪い意味で潔癖で、融通の利かなさがあり、人間関係が全く上手く行かないだけでなく、やはり自分自身とも上手くやれなくなっているような、清潔さと引き換えに何か非常に大切な人間らしさを失った不自然な人間だ。

それはちょうど、理性が倫理に置き換わったというだけなのかもしれない。それも結局は「自分の思う倫理」「自分の思う善」でしかなく、ただの自分勝手さだというのに。だからせめて、偉ぶってはいけない。その正しさが自分で作り出しただけの、根拠のないものだという自覚を持ち、誰かがそれに背くことをやっていたからと言って、鼻をつまんだり、眉をひそめて軽蔑する権利は私には無いということを常に忘れないようにしなければならない。どんなに彼らが恐ろしく思えても、それは彼らが恐ろしい人間だからではなく、私が私の内なる彼らに対して畏怖し、自分自身を恐れている、ただそれだけのことなのだから。

（２０２２年６月　蜂の巣のような無数の小さな暗い部屋の一室）